

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤を植穴土壌混和処理（0.5g/株）1回及び1%粒剤を生育期株元散布（2g/株）2回処理したところ、散布後1日の最大残留量は、 $<0.05$ 、 $0.05\text{ppm}$ であった。

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の植穴土壌混和処理（0.5g/株）1回及び15%燻煙剤を2回燻煙（50g/400 $\text{m}^2$ ）したところ、散布後1日の最大残留量は、 $0.24$ 、 $0.14\text{ppm}$ であった。

ピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の定植時植穴土壌混和処理（0.5g/株）1回散布及び20%水溶剤の4000倍希釈液を2回散布（150、220.4L/10a）茎葉散布したところ、散布後1日の最大残留量は、 $0.32$ 、 $0.43\text{ppm}$ であった。

#### ㊦ なす

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の植穴混和処理を1回散布（1g/株）したところ、散布後63、60日の最大残留量は、 $0.04$ 、 $0.02\text{ppm}$ であった。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後1～3日の最大残留量は、 $0.150$ 、 $0.584\text{ppm}$ （GC法）であった。ただし、これらの結果は1機関での分析とされる。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は、 $0.51$ 、 $0.33\text{ppm}$ （統一法）であった。ただし、これらの結果は1機関での分析とされる。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の植穴混和処理を1回処理（1g/株）及び20%水溶剤の2000倍希釈を3回散布（150、400L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、 $0.50$ 、 $0.27\text{ppm}$ であった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の植穴混和処理を1回処理（1g/株）及び15%燻煙剤を3回処理（50g/400 $\text{m}^3$ ）したところ、散布後1日の最大残留量は、 $0.14$ 、 $0.12\text{ppm}$ であった。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の定植時植穴混和処理を1回処理（1g/株）及び1%粒剤を3回生育期株元散布（2g/株）したところ、散布後1日の最大残留量は、 $<0.05$ 、 $<0.05\text{ppm}$ であった。

なす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙剤を3回散布（50g/400m<sup>3</sup>）したところ、散布後1～7日の最大残留量は、0.07、0.23ppmであった。

#### ③⑥-1 とうがらし類

とうがらし類（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を2回散布（200、267.56L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、0.16、0.07ppmであった。

#### ③⑥-2 ししとう

ししとう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を2回散布（300L/10a）したところ、散布後8、7日の最大残留量は、0.36、0.28ppmであった。

#### ③⑥-3 食用ほおずき

食用ほおずき（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（200L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、<0.05、<0.05ppmであった。

#### ③⑦ きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の株元散布を1回散布（1g/株）したところ、散布後48、46日の最大残留量は、0.09、0.02ppmであった。

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（171～300L/10a）したところ、散布後1、3日の最大残留量は0.42、0.26ppmであった。

きゅうり（果実）において、15%燻煙剤を3回燻煙（50g/400m<sup>3</sup>）したところ、散布後3、1日の最大残留量は、0.32、0.52ppmであった。

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の株元散布を2回（定植時1g/株及び生育期0.5g/株）及び1%粒剤を3回散布（2g/株）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.10、<0.05ppmであった。

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤を株元散布を2回（定植時1g/株及び生育期0.5g/株）及び15%燻煙剤を3回燻煙処理（50g/400m<sup>3</sup>）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.20、0.06ppmであった。

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤を株元散布を

2回（定植時1g/株及び生育期0.5g/株）及び20%水溶剤の2000倍希釈を3回散布（150～200L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.29、0.29ppmであった。

⑳-1,2 かぼちゃ

かぼちゃ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（300L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、<0.05、0.21ppmであった。

かぼちゃ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の定植時植穴土壌混和（1g/株）及び20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（300又は200L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.06、0.08ppmであった。

⑳-3 ズッキーニ

ズッキーニ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙成型剤の燻煙処理を2回処理（50g/400m<sup>3</sup>）したところ、燻煙後1日の最大残留量は、<0.01、<0.01ppmであった。

㉑ すいか

すいか（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙剤を3回処理（50g/400m<sup>2</sup>）したところ、処理後7、3日の最大残留量は、0.06、0.09ppmであった。

すいか（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の定植時植穴土壌混和（2g/株）1回及び20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（200L/10a）したところ、散布後7、14日の最大残留量は、0.06、0.07ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

㉒ メロン

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（200・300L/10a）したところ、散布後7、14日の最大残留量は、0.14、0.03ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の定植時植穴土壌混和（2g/株）1回及び20%水溶剤の8000倍希釈液を3回散布（150～200L/10a）したところ、散布後3、7日の最大残留量は、<0.05、<0.05ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙剤を3回処理

(50g/400 m<sup>2</sup>) したところ、処理後7日の最大残留量は、0.16、0.14ppmであった。

④2 にがうり

にがうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（200L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.16、0.20ppmであった。

④-1 ほうれんそう

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を2回散布（150～200L/10a）したところ、散布後3日の最大残留量は、2.52、1.66ppmであった。使用方法について、散布後14日への見直し（④-2参照）を行ったところ、最大残留量は、0.42、0.06ppmとなった。

④-2 ほうれんそう

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を2回散布（200L/10a）したところ、散布後3日の最大残留量は、13.0、2.10ppmであった。短期暴露量推計の試算も勘案し、使用方法について、散布後14日への見直しを行ったところ、最大残留量は、1.52、0.32ppmとなった。

④4 オクラ

オクラ（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍液希釈液を1～3回散布（150L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.18、0.41ppmであった。

④5 さやえんどう

さやえんどう（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は0.84、0.26ppmであった。

④6 さやいんげん（さや）

さやいんげん（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（150L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.52、0.26ppmであった。

さやいんげん（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（150～400L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.50、1.45ppmであった。

④-1 えだまめ（さや）

えだまめ（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、2%粒剤の土壌混和処理（3kg/10a）及び20%水溶剤の2000倍希釈液散布（150L/10a）を3回散布したところ、散布後7日の最大残留量は、1.42、0.83ppmであった。

④7-2 えだまめ（さや）

えだまめ（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（150L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、0.31、1.48ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

④8-1 エンサイ

エンサイ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を2回散布（200L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量、0.42、2.03ppmであった。

④8-2 ふだんそう

ふだんそう（葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を2回散布（150、200L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、1.62、1.94ppmであった。

④8-3 つるな

つるな（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、1.8、2.8ppmであった。

④8-4 モロヘイヤ

モロヘイヤ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（200L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は、1.01、0.52ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

④8-5 食用さくら（葉）

食用さくら（葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を1回散布（300L/10a）したところ、散布後3日の最大残留量は、1.22、0.33ppmであった。

④8-6 やまのいも（むかご）

むかご（やまのいも）（珠芽）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は、0.15、0.08ppmであった。

㊸ 温州みかん

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（400L/10a）したところ、散布後14、21日の最大残留量は、2.76、1.22ppmであった。

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（400L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、0.17、0.02ppmであった。

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙剤を3回処理（50g/400 m<sup>2</sup>）したところ、処理後3日の最大残留量は、1.54、0.74ppmであった。

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、15%燻煙剤を3回処理（50g/400 m<sup>2</sup>）したところ、処理後3日の最大残留量は、0.08、0.05ppmであった。

温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回散布（樹幹散布）（30L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、<0.05、<0.05ppmであった。

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回散布（樹幹散布）（30L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、<0.05、<0.05ppmであった。

㊸ 夏みかん

夏みかん（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（400L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、0.54、0.90ppmであった。

夏みかん（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回散布（樹幹散布）（30L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、<0.05、<0.05ppmであった。

㊸ -1,2 かぼす

かぼす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（400L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、0.88、0.53ppmであった。

かぼす（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回散布（樹幹散布）（30L/10a）したところ、散布後16日の最大残留量は、

<0.05ppmであった。

⑤-3 すだち

すだち（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回散布（樹幹散布）（30L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、<0.05ppmであった。

⑤② りんご

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（400L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、0.19、0.44ppmであった。

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（500L/10a）したところ、散布後7、14日の最大残留量は、0.5、<0.2ppmであった。

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（500、600L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.41、0.50ppmであった。

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（500L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.39、0.80ppmであった。

⑤③ なし

日本なし（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（350、700L/10a）したところ、散布後3日の最大残留量は、0.18、0.28ppmであった。

なし（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（400L/10a）したところ、散布後14、21日の最大残留量は、0.34、0.12ppmであった。

なし（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布（400、600L/10a）したところ、散布後1日の最大残留量は、0.28、0.74ppmであった。

⑤④ びわ

びわ（果肉）を用いた作物残留試験（1例）において、20%水溶剤の2000倍希釈

液を3回散布(400L/10a)したところ、散布後1~7日の最大残留量は、 $<0.01$ ppmであった。

びわ(果肉)を用いた作物残留試験(1例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布(400L/10a)したところ、散布後1日の最大残留量は、0.02ppmであった。

⑤⑤ もも

もも(果肉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布(400L/10a)したところ、散布後7日の最大残留量は、0.42、0.23ppmであった。

もも(果肉)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布(400、500L/10a)したところ、散布後3日の最大残留量は、0.69、0.36ppmであった。

⑤⑥ ネクタリン

ネクタリン(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布(600、700L/10a)したところ、散布後3日の最大残留量は0.28、0.42ppmであった。

⑤⑦ すもも

すもも(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布(400L/10a)したところ、散布後7日の最大残留量は、0.12、1.23ppmであった。

⑤⑧ うめ

うめ(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を2回散布(400L/10a)したところ、散布後7、21日の最大残留量は、1.10、0.62ppmであった。

⑤⑨ おうとう

おうとう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希釈液を1回散布(500、700L/10a)したところ、散布後3日の最大残留量は、0.92、0.68ppmであった。

⑥⑩ いちご

いちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の4000倍希



积液を2回散布(150L/10a)したところ、散布後3、1日の最大残留量は、0.18、0.44ppmであった。

いちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希积液を2回散布(200L/10a)及び2%粒剤の植穴混和处理を(1g/株)1回処理したところ、散布後1日の最大残留量は、0.86、0.78ppmであった。

いちご(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、20%水溶剤の4000倍希积液を2回散布(200L/10a)及び2%粒剤の植穴混和处理を(1g/株)1回処理したところ、散布後1日の最大残留量は0.70ppmであった。

いちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希积液を2回散布(200L/10a)及び2%粒剤の植穴混和处理を(1g/株)1回処理したところ、散布後1日の最大残留量は、0.46、1.38ppmであった。

いちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、15%燻煙剤を2回散布(50g/360~400m<sup>3</sup>)したところ、散布後1日の最大残留量は、0.41、0.41ppmであった。

#### ⑥1 ブルーベリー

ブルーベリー(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の4000倍希积液を1回散布(300L/10a)したところ、散布後1日の最大残留量は、<0.5、1.0ppmであった。

#### ⑥2 ぶどう

ぶどう・デラウェア(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希积液を2回散布(250L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量は、2.88、2.51ppmであった。

ぶどう・デラウェア(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2000倍希积液を2回散布(200、250L/10a)したところ、散布後14、11日の最大残留量は1.47、2.36ppmであった。ただし、後者の試験は適用の範囲内でおこなわれていない。

ぶどう・巨峰(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、20%水溶剤の2000倍希积液を2回散布(250L/10a)したところ、散布後14日の最大残留量は0.24ppmであった。

ぶどう・巨峰(果実)を用いた作物残留試験(1例)において、2%粒剤を2回樹

冠下散布 (6kg/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は、 $<0.05\text{ppm}$  であった。

ぶどう・デラウェア (果実) を用いた作物残留試験 (1 例) において、2%粒剤の樹冠下散布を 2 回散布 (6kg/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は、 $<0.05\text{ppm}$  であった。

ぶどう (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は、0.98、1.14 ppm であった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

⑥③ かき

かき (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 3 回散布 (400、420L/10a) したところ、散布後 7 日の最大残留量は、0.40、0.20ppm であった。

⑥④ キウイフルーツ

キウイフルーツ (果肉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 3 回散布 (260、500L/10a) したところ、散布後 7 日の最大残留量は、 $<0.05$ 、 $<0.05\text{ppm}$  であった。

⑥⑤ マンゴー

マンゴー (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 3 回散布 (300、700L/10a) したところ、散布後 35、21 日の最大残留量は、0.44、0.44ppm であった。ただし、後者の試験は適用の範囲内で行われていない。

⑥⑥ パッションフルーツ

パッションフルーツ (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 2 回散布 (312.5、267L/10a) したところ、散布後 28 日の最大残留量は、0.04、0.30ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

⑥⑦-1 いちじく

いちじく (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 2000 倍希釈液を 3 回散布 (400L/10a) したところ、散布後 1 日の最大残留量は、0.44、0.47ppm であった。

⑥⑦-2 アセロラ

アセロラ (果実) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 4000 倍希釈液を 2 回散布 (556、220L/10a) したところ、散布後 7 日の最大残留量は 0.22、0.40ppm

であった。

⑥7-3 カリン

カリン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の1000倍希釈液を1回散布（40L/2樹）及び20%水溶剤の2000倍希釈液を1回散布（400L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、0.34、0.24ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

⑥7-4 あけび

あけび（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を2回散布（500L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、0.17、<0.05ppmであった。

⑥8 茶

茶（荒茶）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を1回散布（300L/10a）したところ、散布後13、14日の最大残留量は、9.88、12.0ppmであった。ただし、前者の試験は適用の範囲内でおこなわれていない。

茶（荒茶）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を1回散布（300L/10a）したところ、散布後13、14日の最大残留量は、19.8、21.4ppmであった。ただし、前者の試験は適用の範囲内でおこなわれていない。

茶（製茶）を用いた作物残留試験（2例）において、18%液剤の2000倍希釈液を1回散布（200L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、5.47、5.40ppmであった。ただし、これらの試験は適用の範囲内で行われていない。

⑥9, ⑦0-1 さんしょう

さんしょう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を1回散布（300L/10a）したところ、散布後7、21日の最大残留量は、2.0、2.3ppmであった。

さんしょう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の200倍希釈液を3回樹幹散布（20L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、<0.2、<0.2ppmであった。

さんしょう（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を6回散布（150L/10a）したところ、散布後45日の最大残留量は、<0.4、1.2ppmであった。

㊦-2 しそ

しそ（葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を2又は3回散布（300L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、それぞれ、0.65、0.50ppmであった。ただし、後者の試験は適用範囲内で行われていない。

㊦-3 セージ

セージ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は、1.9、<0.5ppmであった。

セージ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は、0.9、<0.5ppmであった。

㊦-4 タイム

タイム（茎葉及び花）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量は0.6、2.4ppmであった。

㊦-5 オレガノ

オレガノ（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、1.4、2.1ppmであった。

㊦-6 あさつき

あさつき（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2000倍希釈液を3回散布（150～200L/10a）及び2%粒剤の植溝土壌混和処理（1回）（6kg/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、0.42、0.56ppmであった。

㊦-7 レモンバーム

レモンバーム（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の4000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後14日の最大残留量は、2.4、0.5ppmであった。

㊦-8-(1) はっか（スペアミント）

はっか（スペアミント）（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の8000倍希釈液を3回散布（300L/10a）したところ、散布後7日の最大残留量は、2.4、2.3ppmであった。

㊦-8-(2) はっか (スペアミント)

はっか (スペアミント) (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 4000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 7 日の最大残留量は、3.3、4.0ppm であった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。

㊦-9 タラゴン

タラゴン (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 4000 倍希釈液を 2 回散布 (150L/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は、1.3、2.06ppm であった。

㊦-10 チャービル

チャービル (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 8000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 21 日の最大残留量は、1.0、1.6ppm であった。

㊦-11 デイル

デイル (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 8000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 21 日の最大残留量は、0.5、0.46ppm であった。

㊦-12 バジル

バジル (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 8000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 21 日の最大残留量は、1.9、1.5ppm であった。

㊦-13 みょうが

みょうが (花穂) を用いた作物残留試験 (4 例) において、15%燻煙成型剤を 3 回処理 (50g/400m<sup>3</sup>) したところ、散布後 1、3 日の最大残留量は、<0.04、0.03ppm であった。

㊦-14 マジョラム

マジョラム (茎葉) を用いた作物残留試験 (2 例) において、20%水溶剤の 8000 倍希釈液を 3 回散布 (300L/10a) したところ、散布後 14 日の最大残留量は、0.5、2.8ppm であった。

これらの試験結果の概要については、別紙 1-1、海外で実施された作物残留試験成績の結果の概要については、別紙 1-2 を参照。

注 1) 最大残留量：当該農薬の申請の範囲内で最も多量に用い、かつ最終使用から収穫までの期間を

最短とした場合の作物残留試験（いわゆる最大使用条件下の作物残留試験）を実施し、それぞれの試験から得られた残留量。

（参考：平成10年8月7日付「残留農薬基準設定における暴露評価の精密化に関する意見具申」）

注2) 適用範囲内で実施されていない作物残留試験については、適用範囲内で実施されていない条件を斜体で示した。

## 7. 乳牛における残留試験

乳牛に対して、飼料中濃度として 0, 6, 18, 60 ppm に相当する量のアセタミプリドを封入したカプセルを 1 日 1 回、28 日間にわたって強制経口投与し、筋肉、脂肪、肝臓、腎臓及び牛乳に含まれるアセタミプリド及び代謝物 IM-2-1 の含量が測定された（定量下限：0.01～0.05 ppm）。

18 ppm 以上の投与群から 筋肉、脂肪、肝臓に、60 ppm 投与群から 腎臓に アセタミプリドの検出が認められ、全ての投与群で、筋肉、脂肪、肝臓及び腎臓に 代謝物 IM-2-1 の検出が認められた。

牛乳については、全ての投与群から、アセタミプリド及び代謝物 IM-2-1 の検出が認められ、アセタミプリドは約 1 日後に、代謝物 IM-2-1 は約 8 日後に、平衡濃度に達するものと推察された（結果については、下表参照）。

表. 乳牛 組織中の親化合物及び代謝物の残留 (ppm) (平均値)

	6 ppm 投与群		18 ppm 投与群		60 ppm 投与群	
	アセタミ プリド	代謝物 IM-2-1	アセタミ プリド	代謝物 IM-2-1	アセタミ プリド	代謝物 IM-2-1
筋肉	<0.01	0.038	0.019	0.16	0.074	0.90
脂肪	<0.01	0.027	0.011	0.064	0.033	0.33
肝臓	<0.05	0.10	0.053	0.39	0.16	2.1
腎臓	<0.05	0.19	<0.05	0.65	0.094	2.3
牛乳	0.012～0.016	0.031～0.059	0.042～0.059	0.13～0.21	0.17～0.21	0.54～0.95

注) 筋肉、脂肪、肝臓及び腎臓は 28 日後の、牛乳は 投与期間中の残留値

上記の結果に関連して、米国では、肉牛及び乳牛における最大理論的飼料負荷 (MTDB)<sup>注)</sup> は、4.5 ppm と評価されている。

注) 最大理論的飼料由来負荷 (Maximum Theoretical Dietary Burden: MTDB) : 飼料として用いられる全ての飼料品目に残留基準まで残留していると仮定した場合に、飼料の摂取によって畜産動物が暴露される最大量。飼料中残留濃度として表示される。

(参考: Residue Chemistry Test Guidelines OPPTS 860.1480 Meat/Milk/Poultry/Eggs)

なお、ヤギに対して、<sup>14</sup>C 標識したアセタミプリドを、7 日間強制経口投与 (飼料中